

# 徳川慶喜公

文學博士 萩野由之

私は徳川慶喜公のことに就て一席の御話をする様にと云ふ加藤博士からの御依頼に依りまして罷り出でました。慶喜公の御事蹟に就ては、一兩度の集會でも御話致したことがありますので、それを御聴きになつた方には、或は重複になる點もあらうと思ひますが、其段は御容赦を願ひます。

慶喜公は二十六歳の時初めて政治界に立ちまして、勅命を以て十四代將軍家茂公の後見職を命せられました。其後二十八歳の時に後見職を罷めて禁裡御守衛總督攝海防禦指揮と云ふ長い職名を拜しました。主として京都に在勤して居られました。さうして三十歳の時(慶應二年十二月五日)に將軍職になられ、其翌年、即ち三十一歳の時(慶應三年十月)に政權を奉還せられ、三十二歳の時に江戸へ歸つて恭順されましたが、其四月から水戸或は静岡に退隱せられ、後東京に歸住せられて昨年七十七歳で薨去になつた次第あります。故に二十六歳から三十二歳まで七年間が公の政界に立たれた間であります。七年間と云ふと極めて短かいやうでありますけれども、其間の公の事蹟の大なるものだけを調べて見ても随分澤山あります。後見職として家茂將軍を輔佐せられたこと、又其際に幕府の政治の諸方面を改革せられたこ

と、上洛して公武の間、即ち朝廷と幕府との間に立つて、或は楔となり、或は油となつて、双方の調和を圖られた事績、又元治元年七月蛤門に長州の兵が襲撃して參つて、彈丸が玉座に及ぶといふやうな大事變に遭遇して、其間禁裡を守護し、玉體の安穩を得ました事柄、引續いて其翌年(慶應元年)に條約勅許と云ふことを奏請致しまして、安政五年以來懸案となつて居つた所の通商條約の勅許を得たと云ふことも大事件であります。其條約勅許の際に、各港の條約の勅許は得ましたけれども、兵庫開港の一件だけは如何にしても勅許がなかつたので、其後更に御願して、兵庫開港の勅許を得た。是も一つの大事件であります。其次は政權奉還から、引續いて東歸恭順と云ふやうな事柄。實に公の七年間の歴史中最の大きなものだけ數へましても、斯く澤山あります。

只今數へ上げました中に就て、慶喜公が嘗て私に御話のあつたことがあります。それは一生の中に死を決したことが三度あつたといふことであります。どう云ふ事であつたかと伺つて見ました所、第一は蛤門事變の時に彈丸雨飛の間を指揮して廻つて居る間に、自分の身邊にも彈丸が三四度飛來し、乗馬は傷き、供に連れて居た者も三四人負傷した。玉座間近く伺候して見ますと、彈丸が外れて其邊りにも飛んで來るので、公卿達は衣冠の上に襷を掛け、今にも御動座といふ騒ぎであつた。其時には實際死を決して、如何にもして玉體の安穩を圖らなければならぬと思つて覺悟をした、それが一つである。

次には慶應元年十月、條約勅許の奏請と云ふことに就て、是亦死を決したことがある。條約勅許と云

ふことは、今から見れば何でもないやうな事ではありますが、當時は頗る困難の事情があつたのであります。元來幕府が條約諸國に對して約束をした事は所謂兩都（江戸、大坂）、兩港（兵庫、新潟）の貿易開始と云ふことであつて、それを慶應三年十二月七日迄に實行すると云ふ約束になつて居つた。初めの約束では今少し早かつたのでありますが、文久五年五月延期することになつて、諸外國の同意を得て、慶應三年十二月七日が開港すべき期限となつて居つたのであります。併ながら英國を初めとして、各國とも成るべく早く開港をしたい、然らざれば不利益であるから、何か口實を捕へて開港したいと云ふ希望であります。そこで慶應元年十二月、丁度十四代將軍家茂公が京都へ上つて居られました時に、英吉利佛蘭西、亞米利加、及び和蘭——和蘭は領事でありました——此四ヶ國の公使が申合せて、四ヶ國の艦隊が揃つて兵庫灣へ乗込んで來て、斯う云ふ要求を致した。幕府と協議をした條約では完全でないから是非共天皇の勅許を得て、條約を完全にしたい。それから兩都兩港の開市を期限前にしたいと、斯う云ふ無理のことを、脅迫的に申して參つたのであります。元來京都附近は外國船の入來ることを非常に恐れて居つたのでありますから、それを知りつゝ態と兵庫灣へ乗込んで參つたのであります。其時分に、其主唱者であつた所の英國公使パークスは頗る頑強の態度であつたので、幕府の老中阿部豊後守などは急に返答することも出来ないから、どうぞ數日の猶豫をして貰ひたいと云ふことを申しましたが、パークスは中々承知致しませぬで、僅に三日間の猶豫をしやう、其間に決答をしなければ、自由行動を執る

と云ふ脅し文句であつた。然るに當時朝廷に於ては攘夷派が盛であつたから、中々條約勅許などと云ふことを承知する譯がない。其事は既に分つて居るから、阿部豊後守は、幕府の老中達と相談をして、是は幕府限りで許すより外仕方があるまい、朝廷の方は後で何とかしたら宜からうと云ふやうな窮策を案出し、殆んど英國公使に承諾を與へんとすることゝなつた。其際に當つて將軍は慶喜公の京都に居るのを招いて相談されました。慶喜公之を聞き、勅許を経ずして幕府の獨斷で此の如き約束をするのは甚だ恐多い事である。從來幕府は朝廷を欺き奉つたことが度々あるのに、今度もさう云ふことをしては恐入るから、是非共是は勅許を得なければならぬといふ意見であつたのであります。所が其返答の期限は明朝に迫つて居ると云ふやうなことでありましたので、然らば兎も角も今一週間の猶豫を諸外國の公使に要求しやうと云ふことになり、大坂の町奉行井上主水正と云ふ者がパークスに會つて談判の結果、漸くして一週間の猶豫の承諾を得ることになりました。さうして慶喜公は其間に京都に歸つて、朝廷の御意見を纏めやうと云ふ考であつた。所が其事が京都へ聞えますると、阿部豊後守は不都合の奴だ、朝廷に奏聞せずして獨斷を以て條約を結ばうとしたのは不都合千萬であると云ふので、過激派の公卿達が御沙汰を奉じて阿部と、今一人の松前と云ふ老中、此二人に腹を切らせると云ふ騒ぎでありました。併し腹を切らせると云ふことは餘り苛酷であるからと云ふので、終に免職謹慎させよと云ふ命令を幕府に下しました。此命に接しますと將軍は大に腹を立てまして、從來幕府の役人は將軍が之を進退するものである。

直接に朝廷から左様な命令を下すことは相成らぬ筈のものである。それでは幕府の存在を認めないのであるから、將軍として居つても一向詰らぬ、辭職すると云ふことになつた。是は老中が仕組んでさう言はせたのでありますが、終に將軍は辭表を書いて出すと云ふことになつた。是は一には慶喜公が今のやうな意見を持て居るから、果して朝廷の意志を醸して穩に勅許を得ることが出來ると云ふならば、さう云ふことを言ふ慶喜公に將軍職を讓つたが宜からうと云ふ策もあつた。そんな悶着もありましたが、慶喜公は將軍の辭職を御止め申し、此上は自分が生命に掛けても朝廷に奏聞して、一週間の猶豫の間に事を纏めやうと云ふので、早速參内して關白職に向ひ、是非共條約勅許の事がなくては、日本は外國から如何なる壓迫を受けるかも分らぬ、京都の如きも忽にして焦土となるかも知れぬと言つて、或は利害を説き、或は威し、或は賤して、終に然らば條約を勅許すると云ふ御沙汰が下ることになり、安政以來の懸案が解決したのであります。

慶喜公が參内をして、此事を奏請して居る間に、かねて薩藩は幕府を虐めやうとして掛つてゐますから、薩藩最負の公卿の手を以て頻に妨害運動をし、又長州派に與する者もそれに參加して妨害をしたので、中々廟議が纏まらない。丁度二晝夜掛つて、大論判の末、終に條約勅許と云ふことになつた。其間慶喜公は一睡もせず宮中に詰切つて居つて、此事が決しなければ歸らないと云ふ意氣込であつた。是は若し此事が行はれなければ、將軍に對しても面白い事であるのみならず、四ヶ國の聯合艦隊は今に

も砲火を送ると云ふやうな形勢であつたから、御膝許は大變なことになる。それを長袖者流が知らないで、此の如き事をして居るのは甚だ困ると云ふので、實に生命を棄て、掛つた談判であつた。是が二度目の死を決した事件で、此事は詳しく申すと餘程長くなりますから、此位にして置きます。

其次に三度目に死を決したと云ふのは、是は伏見鳥羽の戦に失敗して江戸に歸り恭順の意を表し、謹慎せられました。江戸城に居つたのではまだ誠意を表することが十分でないといふので、江戸寛永寺内の大慈院と云ふ寺に屏居謹慎せられました。所が其時官軍が江戸に討入ると云ふやうな噂もあり、何時上野の山は官軍に圍まれるかも知れぬ。又勅命を以て切腹を仰付けられるやうなことがあるかも知れぬと云ふので、有ゆる書類は悉く之を焼棄て、何時でも切腹の出来るやうにして御沙汰を待つて居つた。是が三回目の決死であります。

で、色々の御事蹟は多いけれども、此三度の決死と云ふことが、公の御一生中最も困難に御考になつて居られたのであります。併ながら世間では夫れよりも彼の政權奉還と云ふことを以て公の御事蹟中最も大切なこととして居るのであります。如何にも尤ものことで、之に就て吾々は勿論異議はありませんが、併ながら政權奉還と云ふことは、慶喜公に取つては豫て考へて居つたことを實行したに過ぎぬのであります。之に就ては左程考慮を要したのではなかつたのであります。其事實を少し申して見ますならば、公は後見職に御就任の當時から既に幕府と云ふものは到底繼續して行けるものではない、原來

武家政治は政治上の變態である、此の如く外國と交際して行くやうになつては、朝廷に於て統一しなければならぬものである、幕府と云ふものは廢棄するのが當然であると云ふ考を持って居られたのであります。文久四年九月に京都から勅使が下つて、即ち三條實美卿と姉小路公知卿と、此二人が長州の後押を得、勅使となつて下向して破約攘夷と云ふ申渡があつた。破約攘夷と云ふのは條約を破棄して即刻攘夷をしろと云ふのであつた。故に當時破約攘夷とも言へば、即刻攘夷と云ふやうな名も付いて居つた。即ち是が長州の論であつたのであります。其即刻攘夷と云ふ事の申渡の爲に正副の勅使が江戸に下ると云ふことに就て、幕府には豫備評議があつた。それを御請するか御請しないかと云ふ評議があつた其時に松平春嶽は、其師範役とも謂ふべき横井平四郎(小楠)の説に依つて、破約攘夷と云ふ朝廷の御主意は早速承諾をしなければならぬと云ふ意見を吐いた。所が慶喜公はそれに大層反對されて、世界萬國が天地の公道に基いて互に誼を通ずると云ふ今日日本ばかりが鎖國の舊態を守つて居ると云ふことは公道にも背くことである、自ら進んで交を海外に結ぶと云ふことに力めなくてはならぬ、其主意を謹で朝廷に奏聞して、條約勅許を願はなければならぬ、如何にも井伊、其他堀田などが勅許を待たずして條約に調印したと云ふことは不正には相違ない、併し一旦諸外國と取交せた上は、今更正も不正もない、是までの條約は勅許を得なかつたから不正であると言つて破約するであらうけれども、向ふは日本の政府と條約したのであるから、不正とは決して認めない。日本人は曲彼れに在りと言ふかも知れないけれども

向ふで不正の條約と認めない以上は曲我れに在りと言ふに相違ない。畢竟是は水掛論で、決し様がないそこで結局戦争となるが、若し戦つて勝てば宜いけれども、萬一勝つた所で名譽とは言へない、負ければ愈々恥だ。斯う云ふことを今姑息に御受をすると云ふことは甚だ宜しくない。併ながら是は幕府を無きものとして立てた意見で、即ち日本全國の爲に何うしたら宜いかと云ふ見地から此の如く論するので到底此議論は幕府と云ふ私を棄て、掛らなければならぬと云ふのが、後見職として大問題に觸れて初めて吐いた所の意見であります。

慶喜公は其頃からもう既に開國主義の論者であつたと同時に、幕府を無きものとして、日本國と云ふ國家の立場から着眼せられて居つたことは、吾々共が感服するばかりでなく、其當時春嶽が屋敷に歸つて横井小楠に話した所が、小楠は男泣きに泣いた。自分は五十何歳の今日まで、こんな辱しい目に遭つたことはない、一橋刑部卿はまだ二十何歳と云ふ弱年だから正々堂々の議論をするよりは、却つて一段引下がつて議論を立てた方が宜いと思つて申した所が、斯う云ふ失敗をした、自分の目の及ばなかつたのは残念であると言つて泣いたと云ふ話が春嶽公の書いたものの中にあります。之を以て見ましても文久の初から幕府を無きものとして考て居られたことは明で、それが段々時勢が進み、時局が複雑になつて來て、愈々幕府を維持することが出來ぬと云ふことを證據立てられるやうになつて來たから、慶應二年八月には腹心の者に向つて、愈々政權を奉還して幕府と云ふものを葬つた方が、國體にも適ひ、又外



交上にも都合が好いから、さうしやうと思ふと、懇々話された。所が原市之進は夫は如何にも公平な立派な御論であるが、併ながら斯う云ふことを決行するに就ては一人の考ばかりでは出来ない。相當の股肱腹心に其事に堪へ得る者が無くてはならぬ。若し一步過つた時には日本は戦國となつてしまふ、餘程好い御議論であるけれども、是は秘密にして時機を御待ちになつた方が宜からうと云ふことを勧めた。公は常に幕府の方に西郷吉之助や、大久保一藏、或は木戸準一郎の如き人があつたら大に助けになつて今少し思ふことも出来るであらうが、何分にも幕府には人材が無くて困る。人材が無いぢやないか、在つても登用することが出来ない。階級制度が餘り八ヶ間しいので登用することが出来ないのは残念のことであると云ふことを常に御しやつて居られた様でありますから、股肱腹心が無いと云ふのは即ち其事である。のみならず政權を奉還した上は、政治機關を如何に組織したら巧く行くかと云ふことに就ても心配せられた。それは佛蘭西公使のロッシュなどからも建白の意見があつて、内閣の組織は斯う云ふやうにしたら宜からうと云ふやうなこともありましたが、或は幕臣の内にも又上院下院と云ふものを置いて相談したら宜からうと云ふこともあつた。併ながら其議員たる公卿大名には、やはり凡愚の者が多いので、愚論の集合になる様では可ないと云ふ心配があり、政權奉還は豫ての宿志であるから、一日も早くしたいが、奉還後を如何にすべきかと云ふ問題の解決に就て、非常に苦心せられたのであります。公は常に、東照宮は徳川幕府を國家の爲に立てたが、自分は國家の爲に徳川幕府を葬る任務に當らう、幕府

を葬ると云ふことも容易ならぬ事であるから、其葬る任務に當らうと云ふことを仰しやつて居られたのでありますから、世間では政權奉還と云ふことを大事に見て、さうして公の御事業中是が最も重いと云ふやうに考て居るのは勿論のことであるが、御自身では、豫て考へて居つたことを實行したに過ぎないのであるから、左程六ヶ敷い事とは思召して居られなかつたのであります。

左様致しますれば公御自身で大事である、生命を棄てなければならぬと云ふやうなことが三度あつたと言はれた、其三度の事も重いが、又世間で見る所の政權奉還も、公は重いと見て居なくとも、是は歴史上重大なる事件であるから、やはり重い中に敷へなければならぬ。併ながら私共が公に就て最も大功績と認めます事は其以外にあります。それは公が三たび死を決せられたと云ふことでもなく、又世間が重しとする政權奉還のこともありません。それ等以上に、もつと日本の爲になつた偉い事が今一つあります、それを今晚御話しやうと思ふのでございます。

それは外の事でもありません、即ち外國の干渉を拒絶したと云ふ事柄であります。其頃幕府に於て最も親しかつたのは佛蘭西であつた。當時佛蘭西公使のレオン・ロッシュと云ふ人は、始終幕府に對して好意を表し、幕府の内部の制度の改革に就ても注意をし、或は長州や薩州が反抗をするに就て、あれは早く斯う云ふやうに處置したら宜からうと云ふやうな意見も出し、又他の諸外國と交渉のある時分に幕府に於ては外交の事務に熟れないから、何時も佛蘭西公使が中に入つて世話をして、都合好く計らつて居

つた。さう云ふ譯でありますから、幕府の側では佛蘭西公使を頼りにして居つた。幕府と佛蘭西とはそんな關係でありました。然る所鳥羽伏見の戦争などが起つて、慶喜公は京阪に居ては騒ぎが治まらぬと見て取りましたから、密に江戸へ逃げ歸つて。明治元年正月十二日の明方に江戸城へ御歸りになつたのであります。其後間もなく佛蘭西公使のロッシュが登城して將軍に謁見を願つた。引續いて宣教師のクレヨンと云ふ者も參りました。さう云ふことが殆ど三日も四日もあつた。それは何の爲に來たのかと云ふと、鳥羽伏見に於て長州や薩州などの兵に御負けになつたのは如何にも残念であらうから、是は佛蘭西が一つ十分に肩を入れます、軍用金も御貸し申す、武器も御貸し申す、如何なる便宜も與へるから再舉を圖つたら宜からうと云ふことを勧めたのであります。併ながら前將軍は終に之を拒絶しました。

是より先きロッシュが建白したことは種々の事について幾度となくありました。それに就て慶喜公は常に耳を傾け、有ゆる事に就て態々親しく面會もせられ相談せられたやうな事もあつた。それは人材登用とか、或は政治上の改革と云ふやうなことに就て、種々佛蘭西公使の意見を聴き、それを參酌したのであります。さう云ふ事があつたに拘はらず、此一事ばかりは斷然拒絶したのであります。そして最後に斯う云ふことを申して居られます。日本の風として朝廷の命と云ふことで兵を指揮する者があつた時は、之に抗することは出来ない。縦令公卿であらうが、大名であらうが、一たび勅命と云ふ名の出た以上は、如何なる事があつても、それに違背することの出来ないと云ふ國體である。故に若し今再度薩長

と兵を交へた所が、朝廷の命に逆ふと云ふことになれば、縦し勝つても朝敵と云ふ汚名は何時までも取去ることが出来ない。さうなれば昨日まで味方をした大名でも、皆官軍の方に附いて、我れに反抗するに極つて居るから、一旦の勝利があつた所で、到底長く維持することの出来るものでないからと、日本の國狀を説いて、折角の好意であるけれども、是は斷然謝絶する、斯う云ふ事を申されたのであります。

幕府の老中、若年寄、其他奉行の重職に居る人々は、如何にも薩長の行動には切齒して、前から含み切つて居つたのであるから、如何なる手段に訴へても、彼等を打撃してやらうと希望して居つたのでありますから、寧ろロッシウの好意を非常に喜んで居つたのでありますから、將軍が此の如く諭すことは却つて氣に入らぬ。故に愈々と云ふ最後には、慶喜公はロッシウと、鹽田三郎と云ふ通譯と三人だけで其事を話たのであります。老中などが其處に居ると、殘念がつて可ないから、それ等の者は斥けて、眞の陸組で拒絶したと云ふことであります。此事は御自身の御話をも伺つたのみならず、當時既に書いた物もあります。が世間には餘り流布して居りませぬ。

一體佛蘭西が此の如き事を日本に申出たと云ふことは何の爲であるかと云ふと、當時の佛蘭西の皇帝那破翁三世は御承知の如く東洋に着目し、何とかして東洋の霸權を握りたい、それには或る一國の援助を得其處を根據として東洋經營の手を伸ばさうと云ふのが其希望であつた。其那破翁三世の命を受けて

レオン・ロッシュは力めて幕府に取入らうとして居つたのであります。故に横須賀の造船所もロッシュが幕府の爲に働いて經營したものである。陸軍の教師を聘備すると云ふ時にも、佛蘭西の公使が一番先きに世話をして、教師を連込んだのであります。斯く佛蘭西が幕府に對して好意を表して呉れる所から、役人の中でも親佛黨とでも稱すべき黨派の者が有力者の中に頗る多かつた。若年寄の酒井飛騨守とか、老中の松前伊豆守、或は勘定奉行として非常に腕を振つた所の小栗上野介、或は竹本淡路守、栗本安藝守（後に栗本鋤雲と號した）。是等の人が殆ど親佛黨の巨魁であつた。斯う云ふ腕利が皆佛蘭西公使に親しむと云ふ所から、幕府の役人は當時斯う云ふことを言つて居りました。佛蘭西公使の信任を得なければ立身出世は出来ぬと。それ位であるから軍艦を注文すると言つても、武器を注文すると言つても、佛蘭西公使が皆仲へ入つて世話をすると云ふ程になつて居つたのであります。

此の如く佛蘭西と幕府とが親密になると、豫て佛蘭西と競争して居る所の英吉利は、どう云ふ感情を持つてあらうか。英國公使のパークスは、之に就て非常に不快の念を抱いたのであります。そこで何とかして幕府以外に自分の援けとなる者を求め、佛蘭西に對抗しなければならぬと云ふ考があつた。それには幕府に反對する薩長二藩と結ぶが最も好い。又朝廷は幕府より以上の權力を有つて居るのである。さうして而も薩長は朝廷の味方であるから、従つて朝廷とも聯合することが出来る。斯う云ふ風に考へて居た所へ。同時に又薩長二藩も幕府が佛蘭西に依つて色々兵備を修め、又貿易上の利益を得ると云ふ

ことである以上は、自分の方でもどうかして外國の有力なる者と結んで兵備を修めたい、利益も得たいと云ふ考があつた。そこで慶應二年七月鹿兒島藩主島津修理大夫は英國公使パークスを鹿兒島に招待した。其時の待遇の様子は、詳しくは分りませぬけれども、非常に優待を極めたと云ふことであります。さうして其時の話の内容も分つては居りませぬが、大體から推測致しまして、三年前には英國其他の軍艦が鹿兒島を砲撃した。其砲撃以來の感情を一掃して、將來親しく交際しやうと云ふ様なことを言つたに相違ない。是が鹿兒島と英吉利とが親しくなつた端緒であつた。其事はパークスの傳にもかいてあるそれ故に世間では之を薩英の會盟と言つて居ります。會盟と云ふ程でもなかつたらうが、兎に角其位に言つて居ります。其薩英の會盟があると云ふことを聞いて、長州藩でも殊に有識の人は、どうぞさう云ふ同盟に加入したいものであると考へ、従て又藩主の大膳大夫父子をもパークスに紹介したいものであると考へたが、其時は未だ薩摩と長州とが反目して居つて、提携が成立つて居なかつたから、會見を果すことは出来ませぬでした。併し其事はパークスには通じてあつたから、パークスは鹿兒島を訪問した歸りに、馬關に立寄つて長州藩主に會はうと云ふことになつて居つたが、恰度其時は所謂長州征伐、長州の方から言へば四境戦の最中であつたから、外國の軍艦が下關に入ることが出来ない故に、パークスの船は其儘歸りましたが十二月の末になると四境戦も治まりましたから、パークスは水師提督キングと云ふ者を態々下關に遣りました。キングが三田尻に着くと、大膳父子は大に喜んで吉川監物とか、兵戶

備後介とか、木戸準一郎とか云ふ腕利の人ばかりを随へて軍艦を訪ふた。キングは大層之を優待して、其時共に寫眞なども撮りました。當時之を長英の會盟と申して居りました。實際にさう云ふ名目があつた譯ではありませぬが、兎に角是が長州と英國と關係を付けた初めであります。

斯う云ふ有様でありますから、幕府が若しレオン・ロッシュの説に従つて兵器を借りやう、軍用金も借りやうと申したならば、佛蘭西は喜んでそれに應じて色々盡力して呉れたであらうが、さうなると長州薩州の方では同時に英國の力を借りて之に當らうとするは明白な事であります。若し此の如くなつて薩長と英國の同盟軍と、幕府と佛蘭西との同盟軍とが互に争ふやうなことになつたならば、日本は内部の戦争だけでなくして、歐洲列強の競争場となつてしまふ。さうなると又歐洲諸國の形勢も一變することになる。さうなくとも那破翁三世の末路は彼れが如きものでありますから、日本は非常の危險に遭遇する譯であつたのであります。然るに慶喜公は能くそれ等の事情を觀破されて居られたから、外國の干涉には少しも應じなかつた。他の事に就ての獻言は採用し、好意も表したであるけれども、此事に關しては少しも動かなかつた。是が爲め嘗に日本帝國が斯く速に文明の域に進む所の基礎を造つたと云ふばかりでなく、世界の平和の爲に與つて大に力があつたことと思ふ。若し我國が歐洲列強の競争場になつたならば、明治の隆運は幾年か後れたであらう、恐らく今日のやうな立派な進歩は期し難かつたであらうと思ひます。故に世間では政權奉還と云ふ事を非常に重く見て居るけれども私はそれよりも此事柄の方

が慶喜公の勳功としては大なるものである、吾々の感謝すべき點も此處にあると、斯様に者へますので、其事を申し上げます。(拍手喝采)

在米矢吹文學士來信

謹啓紀要御惠贈閱了仕候内外文紀要公表の御計畫欣喜罷在候先日もハーバート大學ラムマン梵語學教授の宅にて印度の來訪者二名と會談致候際話頭は何時しか國際問題に及び候折同教授は新聞紙の輿論となり街頭市民の聲となる前に先づ各國の學者は人の知らざる自己の研究室にて眞個に各國の成立を理會し相互の和解も研究の光明に由りて照すの責任あり北米合衆國が曾て荒野たりし時日本は燦爛たる文化を有し印度は世界歴史の初期に於て既に高遠幽玄なる思想に耽りつゝありきなど語られ候日本は強兵の國家として世界に知れ渡り居り候も思想界に於ける吾祖先の豊富精鍊なる遺業は未十が一も世界的に紹介せられ居らざるを思ふて遙に御計畫を欣賞致居候草々不一